も、今日まで世に傳はつて居ることを公にした人がないやうであるから、共に湮滅に歸したものと思はれる。普寂が不行世惜哉と慨いたのも道理である。此の際曾て漢譯本から回鶻文に重譯された本書が發見されたことは、假令それが一部分の殘卷に過ぎないにしても、甚だ重要の事件と言はなければなるまい。

五　漢譯本安慧の倶舍論實義疏

前項に於て、安慧の倶舍論の釋の漢譯本が現存しないと考へられることを述べた。然るに自分は佛國巴里の國民圖書館（Bibliothèque Nationale）に於て、ペリオ（P. Pelliot）教授の敦煌から齎した漢文書の調査中に、偶然その 3196 の番號を附せられた卷子の首に、「倶舍論實義疏卷第一、惣二萬八千偈、尊者悉地羅末底造唐言安慧」と題したものを發見したので、千古の逸書を捜求し得た喜に滿ちて、早速其の內容を調べて見た。此の卷子には、同書の第一卷より第五卷までが收められ[10]、書體の上から見れば、唐代を下るものではないと思はれる。第二卷以下、卷首に各卷名を記した下に、一々「尊者安慧造」と記されてあるから、一見した所では、之が安慧の倶舍論實義疏なることと、疑ふ可らざるものゝ如く思はれる。併しながら少しく立入つて調べて見ると、此の實義疏といふものゝ大部分は、玄奘譯の倶舍論の頌と長行とを處々抽出して之を連接したものに過ぎないのであつて、此の五卷は倶舍論の卷一より卷三まで、卽ち界品から根品に亙つて居る。尤も此等の五卷中の或部分、特に第一卷に於ては、疏としての性質を帶びて居ると思はれる所もあり、また第四・五の兩卷中に「釋曰」として附せられた僅少の文句が三ヶ所に存するが、それにしても之が光記や述記に見えるやうに、安慧が正理師を論破する爲に作つた倶舍論の疏であると